

「実践の技術学」について

——垣内松三先生の「国語教育講話」を中心に——

野 地 潤 家

国語教育学の技術学的性格を考えていくのに、ここで、垣内松三先生の「国語教育講話」（昭和11年1月1日、同志同行社刊、菊判四一―一ペ）のばあいをとりあげたい。

「国語教育講話」では、国語教育における「実践の技術学」が中心主題になっている。それは主として、「芦田先生の教壇を基礎として」（同上書、三五二―）考えられたものであり、実践の事実をふまえての考察である。理論と実際とを結ぶものとして、「実践の技術学」をどう考えていくべきか——この問題が「読方教育」の面から、考察されている。

本稿では、「国語教育講話」の成立・位置・内容について考察し、その「実践の技術学」の学的性格について考えをいきたい。

二

「国語教育講話」は、その序に、「芦田先生の教壇行脚十年を記念するためにこの書を献げます。この書に収めた講話五篇は青山広

志氏の筆録せられた恵雨会研究会に於ける講演記録に基づき補訂を加えたものであります。」（同上書、垣内先生序、一―）と述べられ、これによって、その刊行の動機と成立の事情を知ることができ

る。芦田先生が教壇行脚に出られたのは、大正一四年（一九二五）九月であるから、昭和一〇年（一九三五）は、ちょうど行脚十年にあたっていたのである。その教壇行脚十年を記念して、垣内松三先生は、この「国語教育講話」を、芦田恵之助先生に献げられたのである。

「国語教育講話」は、つぎの五章から成っている。

- 第一章 国語教室
- 第二章 実践の技術学（上）
- 第三章 実践の技術学（中）
- 第四章 実践の技術学（下）
- 第五章 国心と国語

これらの各章は、それぞれ選暦記念教育大会、恵雨会講演会、国

語教育講習会などで講演されたものの録を補訂されたものである。

それらは、つぎのような題目でなされている。

第一章 国語教室↑第二回惠雨会講演（昭和9・10・14、東京戸山小）「国語教育の根基」、「同志同行」3の10、昭和10・1・1、3の11、昭和10・2・1、収録。

第二章 実践の技術学（上）↑第三回惠雨会講演（昭和10・3・27、東京戸山小）「説方教育に於ける実践の技術学」——中学年説方教育に即して——、「同志同行」3の11、昭和10・2・1、予告、3の12、昭和10・3・1、収録。

第三章 実践の技術学（中）↑国語教育講習会講演（昭和10・6・7、8、9、神奈川伊勢原小）「説方教育に於ける実践の技術学」（七時間）

第四章 実践の技術学（下）↑教壇行脚十周年記念第四回惠雨会講演（昭和10・9・22、東京戸山小）「立言の単純化」

「同志同行」4の7、昭和10・10・1、要項のみ収録。
第五章 国心と国語↑還暦記念教育大会講演（昭和8・12・28、東京日本青年館）「国心と国語」、「同志同行」2の12、昭和9・3・1、3の2、昭和9・5・1、収録。

これらの講演は、

Ⅰ「国心と国語」・「国語教育の根基」

Ⅱ「説方教育に於ける実践の技術学」——中学年説方教育に即して——・「説方教育における実践の技術学」

Ⅲ「立言の単純化」

の三群にわけることができる。

このうち、Ⅰの「国語教育の根基」は、本書「国語教育講話」の序章の位置に立ち、Ⅱ・Ⅲは、「実践の技術学」（上・中・下）として本論をなし、Ⅰの「国心と国語」は、結章の意義をもになっている。

右の講演のうち、Ⅱの二つは、芦田恵之助先生の教壇を奥地に観察され、それが随処にとりあげられている。Ⅲのばあいは、教壇行脚十周年を記念して、芦田先生の三つの主要著書「説み方教授」（大正5年4月21日、育英書院刊）・「第二説み方教授」（大正14年9月15日、芦田書店刊）・「国語教育易行道」（昭和10年5月20日、同志同行社刊）をふまえていられる。

（なお、第一回惠雨会講演は、昭和9年、「国語教育の基礎工作」という題でなされている。その筆録は、「同志同行」3の5、昭和9・8・1）に収められている。）

三

「国語教育講話」は、教壇行脚十年を記念して、芦田先生に献けられたものであったが、これはさきに見たように、主として昭和八年末から昭和九年、一〇年の講演筆録であった。なかでも、昭和一〇年における講演活動が中心になっていて、その関心は、「実践の技術学」に向けられている。

ところで、垣内松三先生は、昭和八年（二月二十九日）、「国語教育の理論と実践」（不老閣書房刊、菊判二八〇ペ）を刊行された。これは芦田先生還暦記念論文集でもあった。この書物には、

一 国心と国語

二 国語教育の実験的研究（上下）

三 国語教育と類型の問題

四 国語教育と国民文化

五 言語共同性(結語)

付録 国語教育誌学考

が収められ、主として、雑誌「国文学誌」「立」「コトバ」などに発表されたものの再録である。昭和八年(一九三三)一年間の研究活動の集成されたものである。

つづいて、昭和九年(一九三四)には、「独立講座、国語教育学」が刊行された。(昭和九年4月から昭和十年10月まで、一二巻のうち、九巻を刊行した。)これは、垣内国語教育学の集大成でもあった。

「国語教育講話」は、この「国語教育の理論と実践」・「独立講座 国語教育学」をうけて、昭和八―一〇年、とくに一〇年の講演活動がまとめられたもので、その成立において、特殊な性格をもっていることがわかる。そこでは、実践への関心がつよく示されている。芦田先生の実践と緊密に結びついて、考察が進められているのも、理論・学理と実際・実地との交渉を示すものとして注目される。

また、垣内松三先生は、「国語教育講話」の姉妹篇として、「国語実践的性格」を刊行される予定であったようである。このこと

は、「同志同行」(5の10、昭和12・1・1)の裏表紙に予告されている。その内容としては、

一 国語教室の瑞気↑↑「同志同行」5の10、昭和12・1・1

二 国語教育の定位と風格

三 国民言語文化の心情圏↑↑「同志同行」5の2、5の4、

5の5、昭和11・5・1、7・1、8・1

四 国語教育者の心位

五 国語教育の実践的性格

などが予定されていた。

この書物は、未刊におわったかと思われるが、そこでは、国語教育の「実践的性格」を中心主題とされる意図があったようであり、国語教育の定位と風格が問題にされようとしていた。「国語教育講話」で問題にされた「実践の技術学」から、さらに、「実践の性格、風格」といった問題の究明が意図されていたとみられる。

「国語実践的性格」は、主として昭和十一年(一九三六)に発表されたものをまとめようとしたものであるが、これ以後も、雑誌「同志同行」には、垣内先生の講演記録が掲げられ、その手記が発表されている。

「国語実践的性格」は未刊におわったが、昭和十五年(一九四〇)二月には、「言語形象性を語る」(昭和十五年2月11日、国語文化研究所刊)が刊行された。これは「言語形象性」(形象理論)について口述されたものの筆録二篇と付録一つとから成っていて、垣内学説の展開過程を理解していく自伝的な資料である。

「国語教育講話」は、芦田先生の教授事象との結びつきのもっとも緊密なものといえる。実地の実践者に向かって、芦田先生の実地授業とともに講演され、しかも、そこに実践の技術学を志向されているところに、その特色を認めることができる。

なお、垣内先生が、「同志同行」誌上に発表された論稿は、つぎ

のようである。(ただし、昭和一〇年以前は、いま省略にしたがった。)

○ 国民言語文化の心情圈(一)	(講 演)	「同志同行」	5の2	昭和11・5・1
○ 「青葉」の教壇事象	(抄 録)	「同志同行」	5の3	昭和11・6・1
○ 国民言語文化の心情圈(二)	(講 演)	「同志同行」	5の4	昭和11・7・1
○ 国民言語文化の心情圈(三)	(講 演)	「同志同行」	5の5	昭和11・8・1
○ 即 表 面 張 力	(あいさつ)	「同志同行」	5の7	昭和11・10・1
○ 国語教室の瑞気	(稿 稿)	「同志同行」	5の10	昭和12・1・1
○ 労作の事象性	(稿 稿)	「同志同行」	5の12	昭和12・3・1
○ 茗溪会館の夕	(あいさつ)	「同志同行」	6の3	昭和12・6・1
○ 五百羅漢の畫幅について	(談 話)	「同志同行」	6の7	昭和12・10・1
○ 国 語 の 力	(講 演)	「同志同行」	6の10	昭和13・1・1
○ 指導過程の問題	(講 演)	「同志同行」	7の1	昭和13・4・1
○ 国語教育者のための倫理学(上)	(講 演)	「同志同行」	7の4	昭和13・7・1
○ 国語教育者のための倫理学(後)	(講 演)	「同志同行」	7の5	昭和13・8・1
○ 小学国語読本の完成と実践	(講 演)	「同志同行」	7の9	昭和13・12・1
○ 「国語教室」を読む	(稿 稿)	「同志同行」	8の10	昭和15・1・1
○ 展 開 の 方 向	(講 演)	「同志同行」	9の4	昭和15・7・1

右のように、講演筆録がその大部分をしめているのである。

四

垣内先生は、本書「国語教育講話」の中で、まず「国語教室」の問題をとりあげ、そこで、「実践」の問題を考察されている。

「実践」について考える場として、「国語教室」がとりあげら

れ、それについて、「国語教育のことを考えて見るのならば、国語教室を訪ねて暫く立って居たら何よりもよい手がかりが見つけられる。それどころでなく、それが最も正しい手続である。」(同上書、四一五頁)、「国語教育の事実に立って論議せられたものであれば、所論に精粗はあっても何か益せられるところがあるものである。国語教育の問題を考えるためには先ず国語教室をよく見なければもの

がいえない。その中でも教育の実践の仕方を広く深く精しく見ぬことが肝要であるが、その機会は容易に恵まれるものではない。故に国語教育の実際に携わらないものの言論は空理空論に陥り、国語教育の実際に与るものの言説も個人的主観的に流れ易く、議論あって実績が挙げられないことになるのであろう。国語教室に於ける実践の仕方を精しく観察し深く考えた意見でなければ理論からも実際からも無用の論議として排斥せられるのは当然なことといわなければならぬ。」(同上書、五〇)と述べ、国語教育研究における「国語教室」本位の考えかたが提示されている。

ついで、「実践」の意義について吟味し、「一切の問題は如何にして教壇に於て実践するかという一点に帰着するとすれば、この究竟の課題に向つて全力を集注するの外はない。」(同上書、七六)とし、「国語教育に於て実践を主張するならば、その根源に還つて先ず、自分が道を行ずる正しい心構をとつて居るかどうかを反省するところから実践が始まるのであろう。実践者は修行者である。こうした意味に於ての実践ということは理論に対するものではなく、またいわゆる実践に対するものでもない。むしろ理論と実際とを超越して一道の白路を見出すところに実践の道があり、その道を踏みしめて行くところに修行がある。」(同上書、八二)と述べ、「国語教育に於ける実践の道は教壇に立つて居る自己を反省するところに最も近い道があると思う。」(同上書、一〇二)とされている。

ここで、垣内先生の意図される「実践の技術学」というのは、どういふものであろうか。「実践の技術学」という術語を用いた理由として、二つが示されている。

その一つは、「実践ということに筋道を立てるためにどうしたら

よいかとすることを考えるに当りて、外の方へ考方がまぎれこまな心構えを定めるの」(同上書、一一一―一二二)に、「技術学」という語を用いたというのである。

もう一つは、「技術学」の語のかわりに、「方法論」の語を用いてもわるくはないが、「理念と実際との關係を整える方法論を技術の近くまでもたらすにはどうしたらよいか」といふ問題がいわゆる実践の筋道を立てる最も主要な点である」(同上書、一三二)と考え、「その場合に技術学というのは法と型とこれを『かた』としてその『かた』の本質を研究するのが技術学という名で呼ばれて好いのではないかと思うのである。」(同上書、一四二)とされ、さらに、「単なる方法論というのではあまりに實際に縁が遠い、また技術というものではあまりに理念と縁が遠い。實際に縁が遠いものでは指導に適しない。そこで方と法と型を結びつけて、実践を實踐たらしむるには、そこに技術学とでも称するものが必要であると思う。しかしこの一点を考慮することによつて日常行ふ説方教育の方に一面に理念を見失ふことなく一面には指導に徹する道を考えるという意味を含めて實際と理論を考えるときに、単なる教授法でもなく、単なる方法論でもなく、その二つを結びつけるための実践技術学というものが、われわれの取扱ひ学問の上にも、また教授法を考へる時にも要求されるのではないか。こう考へて、これに技術学という一つの符牒を与えて見たのである。」(同上書、一四二)と述べ、また、この実践の技術学という語を用いることによつて、「私は国語教育事象としていきいきと働いて居る『道』をこの中に現わして見たいと念願して居るのである。すなわち、国語教育に於ける実践の技術学というものは現在の国語教育に対するいろいろな考へ方

から実践という一途が目がけられて居るのであるが、その実践を明かにして、更にその実践を実践たらしむるために如何にしてその目的を貫徹するかということを考えるのが国語教育に於ける実践の技術学という標語の意味合いである。」(同上書、一五二)と、その理由を述べられているのである。

このように、垣内先生は、実践の筋道をしっかりとたてるために、実践の技術学を志向されるのである。この実践の技術学の出発対象としては、

1 教材の研究、2 学習の研究、3 指導の研究 の三つの問題を設定され、これらの中でも、国語教育の媒材としての教材の研究をもっとも主要な位置をしめるものと考えられた。一まず第一に教材の研究を基礎として特にその内部構造を考えたい。その立場から児童の学習状態を観察し、そうした学習状態に直面して指導の問題を考える。そして教材、学習、指導の全体の有機的関係を目ざして考を進めたい。」(同上書、一六二)と述べられている。

さらに、垣内先生は、当時の国語教育の史的転回を指摘し、サクラ説本の出現による国語教育の新生を説き、国語教育の根基を固め、国語の力を自覚して、国語教育を充実させていくべきことを強調された。「国語教育の史的転回の基礎づけをなすもの一つは国語教材である。」(同上書、二六二)として、「小学国語読本」(サクラ説本)の編纂体係について述べ、語彙・文法・文体の問題に言及し、新説本による国語学習の深化の現象を指摘し、国語教室の空気を明澄ならしめる実践を期待されているのである。

五

垣内先生は、国語教育について、実践の技術学を考えていくのに、とくに芦田先生の教壇を基礎としていられる。その立場から、垣内先生の「実践の技術学」の内容は、

- 一 形象の問題
- 二 理會の問題
- 三 形象と理會
- 四 動力的統一
- 五 動力的統一の構造
- 六 事象論理の展開
- 七 事象論理の基礎
- 八 内面動力的体系
- 九 自証体系
- 〇 師弟共流
- 一 說綴一如
- 二 内面動力的統一

垣内先生は、まず、教材研究に即して、「形象」の問題をとりあげられた。「ウグヒス」(小学国語読本巻二)、「乃木大将の幼年時代」、「登校の道」の、低・中・高のそれぞれの教材を手がかりとしつつ、教材研究における実践の技術学を考察された。これについて、垣内先生は、「実践の技術学は教材研究の實踐に際して、これだけのことは手を抜いてはならないという諸項目と、又これ等の細目に就いて十分に手を尽くせば教材の研究が徹するといふ諸条件を残らず見透しをつけ、それを組み立てて実践を促進する動力を動かそうとするのである。」(同上書、六八―六九)と述べ、また、「教材の研究に於て最も重要なはその教材の本質を捉えることであるのはいうまでもなく、従つてそれを明かにするために単に外面的な文の形象解説ではなく、その形象性を明確にすることが教材研究に於ける実践の技術学と称すべきものであつて、この全面に亘りて手を尽すならば教材の機構はつきり把握されるのである。」(同上書、七三)とし、さらに、「教材の機構を十分

に見つめて、その研究の實踐を尽す手續に就ては、文の本質分析に關する研究によって明晰に指摘されて居る。こうした手續を踏んで最善を尽して吟味する事は決して方法的なものでなくて、實踐に於ける理會の技術學といつてよいと思ふのである。技術學というのはただ文を通読し精読し味読する技術ではない。その三者の關係を統一して文を見るにはこれだけのことは手を抜いてはならぬということ、若しどこかに手を抜いたらばすぐに全体の組立が崩れてしまふということに注意深くまとめることであつて、ラジオのどこかに故障があつても音が聞えなくなるのと同じように、どこか手を抜いてあつたら、その手續が果されないのであるから教材研究の實踐の技術學の目的はこれだけは手を抜いてならぬということを明瞭にすることである。」(同上書、八〇頁)、「教材研究に於てわれわれの最後の目標として考へるのはこの多聲的統一ということである。その手續としては縦と横との間に響き合つて一言一句句読の微に至るまで生々とした機能を荷担する言葉であることを見出すことが教材の研究に於て要求せられる必要條件である。これによつて教案の立方も自から異つて來、また一言一句に対する注意も自然に變つて來なければならぬのである。」(同上書、八一―八二頁)と述べられてゐる。

なお、垣内先生は、教材機構の問題と関連して、板書および学習帳のことに、實踐の技術學上の問題として、言及されてゐる。

つぎに、垣内先生は、「理會」の問題をとりあげられた。「理會」といふ問題は説方・綴方の教育に於て最も注意しなければならぬ重要な課題であるが、國語教室に於ける事象としては『理會の循環』という方がよく合つて居る。「わかる」といふことの『うすまき』

の中に國語教育の生々で行われる有様を目の前に現わすには、こゝまでつきつめて謂つた方がよいと考へる。」(同上書、九五頁)とされ、「わかる」といふことについての研究を、實踐解釈學の面からとりあげ、児童の「理會」の類型を、A・B・C・Dの四類に分けて説き、「それぞれの児童にそれぞれの力に應じてわからせるようにするのはどうしたらよいかということが實踐解釈學の問題である。」(同上書、一〇一頁)とし、その實踐解釈學の主眼は、「受持の児童を十分に説方の勉強に目覚めしめそれを生い立たせ、且つ練りあげるには如何なる手續を踏まなければならぬか」といふ事を研究する」(同上書、一〇一頁)ことにあるとされてゐるのである。

ついで、芦田教式(1)よみ、(2)話しあい、(3)よみ、(4)かく(5)よみ、(6)とく、(7)よみ)の各項に即して、「読みの心がまえ」・「理會の循環」を中心に、實踐技術學的分析を試み、説方教育についての實踐の技術學建設の方向を示された。

さらに、垣内先生は、「事象が理念によつて高められ理念が事象によりて深くされる理念と事象との關係を明かにすることは實踐の技術學の目的とするところである。」(同上書、一三七頁)が、「國語教育に於ける實踐の技術學を組織し且つ實踐するためには指導者の深部意識の純粹な内省に俟たなければならぬ」(同上書、一三八頁)とされてゐる。

ついで、垣内先生は、芦田教式に対する諸批判に対して、所見を開陳され、單純化され合理化された芦田教式の特徴を指摘しつつ、「この教式のもつ重要な特性は、眼・耳・口・手・心、その全体性を訓練するといふところにこの教式の精神があるのではないかと思ふ。そうすれば、實踐の技術學として今日各方面から研究されて居

る生理学的、心理学的或は社会学的、同時に哲学的研究等の成果はこの単純化された、簡単な教式の中に全部包み込まれて居るように、私には見えるのである。勿論この教式は芦田先生多年の教壇修行の結晶である。私の考えているのは諸精神科学に於て研究されて居るものを如何にして国語教育の実践に生かすか、ということに關心を有するのであるが、今いろいろ学問の方面から研究されて居るものを簡単に五到という言葉をもって総括すれば、この全部がこの教式の結晶の為に密接なる関係のあることが見出されるのである。」(同上書、一五〇頁)と述べられた。芦田教式の実踐的特性を明確にすることに、説方教育の自立性の問題を論じ、「実踐の技術学としてなすべきことは、この教式に対して、生理的、心理的、社会的、哲学的に考えられる各方面からの研究を『よみ』の一点に集中するだけの役割である。如何にしてこの教式によって、真に実踐を可能ならしめるか、真に実踐の目的を達するか、ということは一にかかってこの教式を用いる『人』にある。故にこの教式について批難を招くようなものがあるとしたら、この教式を探り、用いる『人』が、それを『人』を以て動力的に統一するか、どうかということであると思う。すくなくともこの教式を用いて実踐をどこまで徹底せしめるためには、教式に対する信条のほかに、この実踐についてどこまでも敬虔なる行為を続けなければならぬと思う。」(同上書、一七二頁)と、芦田教式を支持し、それを実踐によって深めていくばあいの留意点が明示されている。

六

さて、垣内先生は、学習指導の面における、実踐の技術学上の

問題として、説方教育における「事象論理」の問題をとりあげられた。この点については、「事象論理」という意味は教材を媒介として児童の学習と、指導者の指導の間にもし出される作用を貫く条理を研究するのである。それ故に事象論理という言葉で現わす研究の対象はそうした事象であるが、その事象の中を通して居る筋道は何であるかということは決して明白になっていなかった問題である。こゝに説方教育の事象論理として取扱う問題は単なる説方教育について考えられる知識的問題でもなく、或は単なる指導の主義方法の問題でもなく、説方の学習指導の間にもされる秩序を明かにしようとする要求をもって居るのである。」(同上書、二一一頁)と述べられた。この事象論理の追求に、研究の目標点を見だし、そこに教育研究の独自性も見いだされている。

事象論理は、「転機」の研究によって、はじめて成立するとされる垣内先生は、「転機」(たとえ製陶に於ける火力のように、文章においては言葉の力というべきものがその聯絡をなしている。これを『転機』という術語で呼ぶ。)について、芦田先生の實踐例に即しつつ述べられ、「芦田先生の教式は動力的統一の構造特に転機を基底として教式が組成されて居るのをその特性とする。」(同上書、二三〇頁)と指摘された。さらに、芦田先生の授業について、芦田教式の根底にあるものは、沈黙の深層からわき起こってくるのではないか、ということを論証しようとされている。

七

国語教育における実踐の魄力は、内面的動力にもつき、国語教育の実踐の規格は、内面動力学的考察によって体系づけられるもの

であるとの考えから、垣内先生は、芦田先生の実践における内面動力的体系をとりあげられた。

芦田先生の三つの主要著書、「読み方教授」(大正5年4月21日、育英書院刊)、「第二読み方教授」(大正14年9月15日、芦田書店刊)、「国語教育易行道」(昭和10年5月30日、同志同行社刊)、「第三読み方教授」とも呼びうるもの。)における中心的立言——「自己を説む」、「師弟共流」、「易行道——説綏一如」を中心に、芦田先生のそれぞれの立言が、その実践の結晶としての意味をもつことを示し、その特質をとらえることによって、芦田先生の実践の展開を根底から跡づけられた。さらに、その実践の精神・理念として「和敬」・「清寂」・「新生」を指摘し考察された。

八

(と)△解釈学との内面に、一方には「と」を解釈する技術学として解釈学を立てたのである。「と」の内面に於ける表現作用を研究する表現学を立てたのである。この形象と理会の中心点に技術学として解釈学と表現学を立てるのは私独自の立方である。」(同上書、二九四—二九五)と述べられ、さらにまた、「唯私の立場に於ては、体用相関の意識現象を現象学的に考察するために国語教室に実際に現れる教室現象を丹念に記載し現象論理を追究して厳密に研究しないでは私の学問的良心が許さないのである。それ故に一挙一動、一言一句と雖もその事象を捉えてそやういふ事象が現れて来るものはどこにあるかということを考えてみるのである。」(同上書、一六四—一六五)とも述べられている。ここには、教材研究・学習・指導を中心とする、垣内先生の実践研究

の基本的立場・態度が示されている。

垣内先生は、かつて、「国語の力」(大正11年5月8日、不老閣書房刊)において、芦田先生の実践例「冬景色」を、センチネス・メソッドの視点から、明確に分析された。このときの「冬景色」は、「読み方教授」の中の記録によるもので、その実地指導を直接に見られたわけではなかった。芦田先生の国語教室を観察され、それを直接に考察の対象とされるようになったのは、「冬景色」分析からみれば、ずっとのちのことである。このことについては、垣内先生みずから、「芦田先生の教壇に参与するようになったのは、実は昭和七年二月末日以来である。教壇行脚十年の中の後三分の一の時期である。(中略)この三年間先生の教壇に参与し得ること十数回であったが、その十数回(引用者注、千駄ヶ谷、田辺、糸魚川、天童、青森、高山、天草、大井、宇和島、戸山、伊勢原、東金など)の実際の御授業を拝見する度に、私としては心ひそかに自分が私の立場で考えて来たことが教壇の上にあると出て居るような感激をもって常に教を仰いで居ったのである。」(同上書、二七三—二七四)と述べていられる。芦田教式による、円熟した実地授業に接し、その実践の特質をとらえ、さらにそこから、国語教育の実践のありかたについて、発展的に探求されたのである。そこには、学理と実地との合致を見る感銘があり、自己の所論の具現された実地指導に接し、その実践の根本を徹底的に究明しようとする熱意があふれている。芦田恵之助という実践人の実践的人格とその実践様式の構造・機能の特質は、的確に深く鋭くとらえられている。

本書「国語教育講話」で述べられている「実践の技術学」は、すべて芦田先生ならびに芦田先生に直接間接につながる恵雨会の人た

ちに向かつてなされた講演であるため、できるだけ芦田先生の実地授業に即して、具体的に説かれている。しかし、その内容は啓蒙的なものというより、芦田先生の實踐營爲に觸発されて、垣内國語教育学の展開・深化をはかろうとされており、そこには、「實踐の技術学」という学問研究へのあたらしい意欲がよよく燃焼している。

「教材—学習—指導」を対象として、精細に論究しつつ、多くの精神諸科学の成果を、實踐に攝取吸収して生かそうとする垣内先生のいきかたは、「實踐の技術学」の誕生を要請せざるをえなかったのである。

「實踐の技術学」を構想し、その見通しをつけるにあたって、芦田先生の實踐が有力な手がかりを与え、資料を提供していることは、見てきたとおりである。芦田教式についても、それをつきはなして批判するよりも、その實踐に參入して、その内面を洞察し、分析していく方法がとられている。ここには、学究としての垣内松三と、實踐人としての芦田恵之助との敬愛に根ざす出あいが見られる。

形象と理會とは、垣内國語教育学における根本命題であったが、その根本命題をふまえつつ、「形象」を追求し、理會する、「理會の循環」として、實踐事象を克明に觀察し、その實踐事象を内的秩序と統一において、とらえようとしたところに、垣内先生の志向された「實踐の技術学」があったとみられる。その論考を支える現象学的なみかたと、内省的方法とは、東洋的な性格もいちじるしい。

形式・内容の二元対立の國語教育を、一元のものに高めていくことは、垣内國語教育学の大きい目標であった。この「實踐の技術

学」においても、その一元の至純な國語教育を希求しての構築が考えられていたのである。

(昭和34年9月17日初稿、昭和36年12月18日成稿)

— 広島大学教育学部助教 —